
痴話と余談の事乍

司馬POO太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

痴話と余談の事作

【Nコード】

N6032K

【作者名】

司馬POO太郎

【あらすじ】

祭という閉鎖的・保守的小天地を全宇宙としてきた主人公は、ある水曜日に高校生によって組織された学生団体「高校生フェスティバル」本部の闘をまたぐ。

以後、開かれた世界観の中で女子の仮初友情劇、純恋愛、男のじめついた人間関係の中に組み込まれていく。

主人公は学生という素姓を軸に祭とフェスの対象的環境下、思想

をもつけて恋愛に溺れつ、人間の愚かさ、恋愛の不思議さ、おのれとは何かを考える。

血の淀んだ若者に捧げよう。

痴話と余談のことながら。

上巻

御殿坂の月

平成十六年九月十九日の陽が落ちなずんでいく。

時に、酉ノ刻の雨止みに、天地は漆絵のように朱黒二色で塗込められている。

轡虫くわちゅうが鳴いている。表の国道をダンプカーが往来する合間ごとに武骨な奏を認めていたが、あるとき、はたと止んだ。

「行つてくる。帰宅は何時になるか分からん」

珍しく、家族に行き先を告げ、衣桁に掛かっている藍の法被はっぴをぶんどつて、土間で雪駄せうたをうがつよりも先に勢いづいたまま勝手口の扉を開けた。小走りに駆けながら法被の襟をただし、柿ノ木のむこの納屋へ行き、自転車を引っ張り出した。

がちゃん、

と、留め具をかかとで蹴り上げた足でまたがり、足の裏をぺだるへ置いたとき、明日からの日々を物憂わざるをえなかった。

十塚町の交差点で西に曲がると、半町むこうに鉄道の高架がみえる。それをくぐり、右すれば、いきなり勾配をけわしくする坂がのびている。

坂の名を「御殿坂」といい、旧城下町の聚落くわじやくへのびている。坂は、何の変哲もない段丘崖だが、トヨタ自動車の資本に熟れた市街地で育ったこの男には、まるで旧時代へさかのぼって行く坂のように見えた。

登りきわめると、自転車をやっと通すほどの「庚申通り」の辻につきあたる。辻口には、東天をのぼりゆく上弦の夕月を支えるように榎えのめの老樹が影となって静まっている。背負う北天は、豊田市駅前

のビル群の暈光ネオンが墨染の天を焦がさんばかりで、そこだけ真昼のようであった。

老樹と夕月を背にすれば、旧拳母城大手門址の四ツ辻がある。これを本通として線対照に長方形の町区が劃かくされている。自転車は、落日の残照に彩られた中央の交叉路、「中ノ町通」を折れ、南進していく。街道沿いには黒腰板に白壁の長屋門、海鼠壁なまこの町倉のそれぞれが銀に焼きしめられた甍むねを葺ふき、軒を並べ、二万石城下の風を伝えている。夕餉ゆづけの炊煙を鼻腔でおかしみながら、ふと仰いだ先の鬼瓦に刻まれた木瓜ぼっこうの紋所に、

(うちの法事を見た幔幕まんまくのそれと同じだ)

と肩身の狭さを思ったのは今が初めてではない。

三河国西国三十三観音三十二番礼所、古刹水音寺の常夜灯が灯る頃、この高校二年生の少壮神谷明德あーちゃんは、その灯影ほかげに自転車を停めた地藏堂を挟んで隣接する会所(町の集会所)とよばれる蔵を併設した平屋へまわった。

「こんばんは！」

「……………」

集合時間一分前の到着であった。すでに集まっていた若衆三十どの顔も、この男の挨拶に見向きもしなかったのは、定刻云々というより、この男の町における年数ぶんざいに由来した。しかし、ただ一人、「遅刻じゃない？」

と、それが特徴の糸を引くような声でなれなれしく話しかけてくる小男があった。

「亮太か。連絡係のおんしから、会所開きが今日あるなどは聞かなんだぞ」

「はてな。そりゃア、すまなんだわ。俺アてつきり知つとるもんだとばかり思つとつたもんでよ」

同期、伊知地亮太は相好をべつとりと崩した。

(ありようは、わざとか)

と、あーちゃんは露骨に眉宇を怪しくして思ったが、一生を同じ町

に捧げる同士であることを顧みたとき、おのれ一個の憤慨など蚊をつぶすよりやすく殺すことができた。

「七時だな」

十三年目鈴木重昭が、首尾よく若衆三十人を二列に編隊する。私語が消え、水音寺の老松の松籟をもつて静寂をなす山車蔵前で、四肢に通う血は熱い。

「東國軸」と墨書された弓張提灯をさげる年行司を先頭に、隊伍は銜尾あい随い、一糸乱れず平屋建の会所の玄関へ吸い込まれていく。後尾につづく若衆二年目のあーちん・亮太と二人の新参が玄関に達するころには、脱ぎ散らかされた百足の雪駄の上を、灰皿を持つていく者、グラスの過不足を告げる者、よく冷やされた瓶麦酒の栓を手際よく抜く者が駆け違つて働いている。あーちんと亮太は新参に履物揃えの仕事を呉れてやり、土間から上がった。上がると、すぐ座敷となつている。三方を障子戸、南に縁側が東西へはしり、天井低く、ちょうど二十八畳ある。その中を、隙間なくコの字に膳部が列べられている。

「おい」

痩せた頬骨の三年目水野裕也があーちんに中瓶を渡し、

「上座から」

と眼で下知した。

神棚を頂く上座には、褐色の羽織に紋付袴の老庄屋三人がすでに端座している。座は直角に折れ、若衆が序列にならつて膝を連ねている。

(白髪頭どもめ)

庄屋らを一瞥、咄、と舌打ちした。

(こいつらが下東町を干し枯らしにしゃがった張本人や。その杯へ、俺は今から酌をさせられるんだ)

ツと、膝をにじらせて中央の権高な猿顔の老翁の盃に酒を満たす。図は、自嘲にもならないものがあった。

あーちんはあくせくと空瓶をたずさえ土間へ下がり、新品の封を

きつて再び座敷に上がった。そのとき、

「何か手伝うことはありませんか」

自分より年若な男子が、泣きつくようにあーちんの裾すそをとらえた。

（新参か）

玄関に上がるも、十の先輩が入れ代わり立ち代わり仕事を占め、思案する間もなくとつた行動なのだろう、とすぐに判じえたが、

「仕事は自分で見つけるもんだ」

と沈痛に言い放った。おのれも同じ台詞で叱咤しったされ、仕込まれてきたのである。しかし、

「仕様がな、今日は仕事をくれてやるよ。これを、」
手にある瓶を呉れてやった。

「奥から酌ついで回り、酌ぐ度に新参の何某と名乗り、お世話になりますと挨拶してきな」

（俺の甘いところだ）

新参の永井は、張り詰めた顔のまま辞儀し去った。永井は要領がつかめずながら、とにかく指示通り働いた。が、膝を屈して瓶を傾ける度に手で制せられてしまう。

「馬鹿かおまえ」

声を低くして痛罵ぼくした者がある。伊知地亮太だ。

「グラスが空か否かくらい見よや。酌は俺らアがやったで、まあ仕事はない」

「他に何か」

「知らんわ」

亮太は小さく嗤わいつと、次の胡麻ごま搗すりにむかった。この欠点は生来のもので、その帰趨ききうするところを知らない。

永井はなすべき挙動に窮し、果ては裕也に尻を叩かれるように仕事を与えられた。

（これが祭か）

永井は驚きの中で祭に失望感を抱いた。

華の裏などこんなものよ。

同じ失望感を抱きながら、あーちんなどは妙に截然としていた。この男には、下町出身という一分がある。重囃翁への忠節と思えば泥水さえ喜んで飲めた。華とは、そうした先に咲くものであるとあーちんは考えている。

賀宴は、戌ノ刻（午後十時）過ぎに終わり、帰宅し寢床に着く頃には日付がかわっていた。

その夜、夢をみた。

本楽の朝であった。翕然と境内に集まった観客は砂塵にまかれ、東西に堵列した屋台の醤油を焦がした匂いにむれる人いきれ。

本殿前は、そこだけが神聖な緊張感で引き締まっていた。袴装束で調べた各町氏子総代が樹齡四百年をかぞえる御神木の太櫓前に堵列している。その一人の老翁が天へ采配を上げた。

巳ノ刻。

無言で、采配が砂塵を切り裂くと、合戦場に響く鉄砲のように虚空で煙火が轟然と炸裂した。それを合図に、山車が動き出すや、白い地下足袋うがった還暦の綱楯年行司が日ノ丸扇を袈裟に振り下ろした。

「それえええ　！」

高さ三間、幅一間ほどの山車が綱楯衆の掛声とともに街道から境内へ直角に曳き込まれていく。

鉄輪のはめられた木輪は轟音を発し、山車の欄間にひしめく金漆の籠を小刻みに振動させる。両脇で秋風に揺り据え翻る赤羅紗地の大幕には、能楽「張良」の一幕が金糸で刺繍かかっている。幕の裏では、「カツコ」という奉納神楽が囃されている。能笛の甲高いひしぎの妙音、鑿々（とうとう）と打つ大太鼓、鼓、大皮の音が轟音の中から漂うさまはえもいわれぬ。

尻の大幕が現われた。

東町。

紙の表裏を返すほどの間であつた。

「おオオ」

観客何万は一同溜息を、あるいは歓声をあげた。それらを呑み込むように、数億枚の黄色が天を覆い、やがて舞い降りてきた。紙吹雪である。人の幾倍もある山車が、黄砂に霞む遠山のごとし観である。

砂煙をあげ、大鳥居をくぐって奉納を飾った東町に他町や観客から拍手が湧くや、再び虚空で煙火が鳴る。

「てめエら、迎えるや」

鉦をからからと鳴らし、酒で焼けた濁声の若衆副年行司が指揮をふる。血潮の狂った体を反転させ、後方を臨む。待つまでもなく、砂煙の中で屹立する大鳥居のむこうから、いま一山が現れた。

『東町に続いて、西町が奉納致します』

マイクロフオンを通した女性の声が境内に響くとき、大鳥居むこうの参道が紫陽花色で明るくなった。威勢よくぶん回し、東西の大提灯を突破し、やおら大きくなる巨楼、赤羅紗の大幕は金銀彩糸で楠正成公父子の如意輪堂正行図が刺繍され、高欄四隅からは長く垂れた御幣は秋風に揺れ、奉納神楽の天土古打分が砂埃のなかから漂って、「西」を染め抜いた紅獅子の大旗を翻し翻して二ツ巻ラッパを吹き乱す。

西町。

「オイサツ、オイサツ！」

と両町の若衆が上山にて対峙し、喧嘩に似た怒濤の覇気をぶつけ合う。風にまき上げられた紙吹雪とともに、凄味に満ちた熱気が天を衝く。

(この日がきた)

陶然の瞬間である。

西町のあと、本町、南町、喜多町、神明町、中町の山車が曳き込まれるはずである。

氏子町は全部で八つある。

「拳母八町」

とは、古くからの総称である。その氏子八町民の精神的支柱である拳母神社と、その大祭「拳母祭り」を創始した別格の権門が下東町にあることが、あーちんの誇りであった。

「三河鈴木一党本家」

当主は、若衆重昭が祖父、二十四代目重圀。

王朝のむかし、源平合戦で功名を立てた九郎義経は奥州平泉に亡命した。

主人の大事。

と、先発した義経家臣亀井六郎重清、鈴木三郎重家を追い、紀州藤白の在所から、己の肉をもって刀槍の盾となるべく主人救援にむかった家臣鈴木善阿弥は、三河の矢作ノ郷で脚疾を患い、療養する間、高館没落の訃報に遭った。善阿弥は矢並という在所に土着し、甲意として一字の精舎を建立するとともに、衣（拳母）ノ宮に吉野水分神社より分神を勧請したと、『寛政重修諸家譜』など江戸時代の編纂物に伝承されている。矢並鈴木氏は、地頭中条氏の被官衆として南北朝の動乱期までに、北は茶臼山の麓の東加茂郡阿摺村から南は碧海郡竹村にいたる三河一帯へ駿々乎と采邑を伸長させ、戦国期には有力豪族として台頭してきた松平氏（徳川家の前身）と矢作巴両川を挟んで幾度も和戦を繰り返した。江戸幕下は旗本。

果たして、鈴木一党本家の直系が、拳母神社の祢宜として東町に居をかまえた一切は不明で、後世の我々は、

「鈴木阿波」

という名で拳母藩主内藤家の古文書に登場する人物を、土地の口伝に基づく事実と併せて信じるほかない。

さて、拳母。現在の愛知県豊田市である。もと市域東部をかすめる矢作川によって削り取られた盆地にある聚落で、古くから水害でよく人が死んだ。ことに宝暦七年の大洪水では、民家五十四軒が流失し、東町の百姓三人が岡崎藩に救出されるなどの大災害があったと、各古文書は異口同音に今へ伝えている。東町・南町・本町の三

町民が、樹木台とよばれる高台へ逃げるように移転したのはこの直後である。

宝暦当時までの二十余年、藩庁の城普請が継続されてきたが、紀州徳川家より養子としてこの地を踏んだ三代藩主内藤学文ふみは、下町におけるを白紙にし、それまで藩主の仮御殿とされてきた台地、樹木台への移転を決定し、数年後に竣工した。

以後、樹木三町は、城下町普請によって政庁街へ発展して維新をむかえ、今日まで「上町」とよばれてきた。対する「下町」には、中世来商都として栄えた五町のほかに、旧三町に留まったままの家、例えば鈴木家は挙母神社の祢宜であるため移転しなかったように、諸事情を申し出て移転せず平成の世まで宮前に住み続けた家々がある。あーちんの神谷家は、その内の一つの「本町」にあり、当時、養蚕・製糸業で全国五本の指に入る出荷量を誇った当地にあつて、煉炭屋を営み資本を肥やした。

祭礼における東町の組織図は、昭和の末年までに上東町の専らとするところとなった。とはいえ、有力町人として三町会の座に列す重囀翁という存在は大きかった。

昭和五十年代、あーちんの下本町はトヨタ自工による区画整備、都市開発や人口流入によつて上・下町の分裂があり、事実上の社会解体をした。前後して、児童激増による小学校の増築が進んだことによつて行政勝手に学区が細分化され、氏子町という江戸時代からの秩序のほころびが激化した。重囀翁は町の明日を憂慮し、五十五年、

「東國軸子供離子保存会」

という後継者の支援機構を設けた。

あーちんの神谷家は、小学校の通学団・子供会の関係から東町として氏子登録され、小中学校九年間、離子はしを稽古してきた。あーちは評判のよい少年で、常に後輩の手本となり、離子の稽古をたすけてきた。

「されば、若衆に推挙しようと思うが、どうだろうか」

とある日、中学三年生のあーちに重圀翁はいった。あーちは諦め顔で、

「お誘い下すつてありがとうございます。しかし、自分は本町に六代の間住みなし、且つわが曾祖父などは煉炭屋角太郎とて旧大字拳母一円で音に聞こえた傑物でありました。上町の庄屋様がたが知らぬはずがありますまい」

「おんしは、なるほど本町に住まうが、本来、拳母の神谷一統はみな東町と決まつとる。神谷君は、祭りが好きか」

「はい。僕の夢は、高欄からわが郷を臨むことです」

「安堵した。明日にでもわしが上のモンにかけあおう。安心せい。」

上のモンが小賢しいことを論あげつらううようなら、この頭を一つ下げれば済む話だ」

と、御仁は禿げかけた頭をさすり、ほくほくと笑つてみせた。齡よわい七十の半ばにしては、えらく背筋の伸びた老人であった。

(この御仁のためなら、命などいらぬ)

渾身の血潮が湧き上がり、あわや平伏しそうな衝動をかるうじて制したが、この昂奮こうふんは一生に二度とはあるまじと、十五に満たぬ少年は生悟つた。

余談ながら、鈴木家という門地をさらにつまびらかにすると、天草一揆後の領民へ年貢半減を実現して崇敬をあつめた代官鈴木重成と重辰しげとぎ、天誅組に襲撃された倉敷代官鈴木源内など、日本史上でたびたび名を残している。つまり、拳母という片田舎などでは、鈴木重圀という老人はとにかく「別格」であり、これ以上の表現は蛇足としかならない。また御仁は、あーちんという一人の少壮からは、そんな遠い昔話などよりも、わが青春の教祖のような存在として尊崇されていた。法被の袖に腕を通し、背に「東」の一字を負うことの重みは、他町はおろか、東若衆でさえとうてい及ばぬものにちがいない。

この男の思春期は、専ら忠義に準じてきた。

神無月初めのある日、目が覚めたときにはすでに家には人がなく、時計を見るまでもなく卯ノ下刻（午前七時）を四半刻ほどまわっていた。

（こりや遅刻だ）

慌てもせず、のっそりと上半身を起こすと、きりきりと音がなるほど鈍くて痛かった。この一ト月ほど、一日を千秋に感じる月はないひねもす精神力で過ごす日々である。

自室の窓から臨めば、拳母神社の杜が見える。そこから突出している二本の幟は、澄み渡った秋空のなかではためいている。

祭まで、あと三日。

（体が重い）

昨日の酒宴はつらかった。二年目のあーちゃんらは飯も回されぬまま日本酒漬けにさせられた。雲を踏むような前後不覚の酩酊のなかで誰かの吐瀉物を拭かされ、その段取りが悪いと床にはいつくばつているところを蹴られ、痛罵され、揚句はみじめなほど泥酔した先輩らの背をさすられ、そこからどう帰路についたか記憶がない。

（今日は一時間前に集合し、昨日の片付けをせねばならない……）

尻は、根の生つるがごとく持ち上がらなかつたが、引き抜くように立ち上がった。途端、臓腑がずりおちるような眩暈におもわず壁に肩をつけたが、それでも本業はまっとうせねばならないと唖える。だからだと制服に着替え、覇気のない顔で勝手口から出掛けた。

途中、商店街の電灯や歩道の街路樹ごとに、

「拳母まつり」

と藍地に白で染め抜かれた小幟が立てられている。

浄水の駅で降りた。

（なんと無生産な日々だ）

秋の闌る、遠く広がる芒の原を眺めて思った。学校がおのれに何をしてくれたか、と松葉色の梳毛糸を綾織にした背広型の制服羽織へ袖を通すあーちゃんは、その軽さに苦笑を禁じ得なかつた。

阿呆が口を開けたようにひたすら広闊こうかつで果てしない空の下は、八千草ちくさが生うにまかせたかつて神風特攻隊の飛行場であったという荒野が広がっている。あーちゃんは朝の温かい陽射しと爽涼の風が吹きぬける草叢くさむくのなかに横たわった旧滑走路おほと思しき道路の脇を、咽喉のどにくすぶる松竹梅の味に吐気をこらえているのか、酢を飲んだような顔をして歩いていく。

やがて施錠された校門が見えてきた。

あーちゃんはだらだらと校舎裏に廻り、金網の柵をよじ越えて渡廊下に出た。そのとき、

「おい、こら」

という、怒声が聞こえた。

あーちゃんは、徐々に足を早めながら怒声の主を一瞥した。

「待てや、神谷」

体育課で、総合格闘技部顧問を務める指導部の教師であることは、眉まで青く剃り下げた賊のような頭からすぐに判じえた。

歩調は、怒声を振り切るように急調子となり、下駄箱で靴を脱ぎ捨てたとき昇降口の扉が壊れる勢いで開けられ、青眉の教師が不動明王の形相で追いかけてきた。

「待てや、ガキが」

あーちゃんは飛びのいた。教師から伸びた手の指が、翻った羽織に触れた。

「うふ、危ねエ！」

笑っている。あーちゃんは階段を飛び越え、廊下を駆け、再び渡廊下へ出たとき素早く身を翻し、窓から外へ飛びのいて追手から逃れた。校内の勝手を知るあーちゃんは、何食わぬ顔で昇降口へ戻って靴をしまい、襟締ネクタイをほどこきながら教室へとむかった。

ぐわらり。

教室の戸を引くとすでに学活がくわつは終わっていた。けだるい体を席に落ち着かせ、教室を見渡した。

阿呆が十二名。

左頬がゆがむ。

(つくづく、見れば見るほど腹が立つ顔触れではないか)

ある者はオニゴッコをし、ある者は他人の文具を隠して遊び、ある者は稚拙な春画雑誌によだれを垂らし、ある者は独り言をつぶやいている。その素性は、とりたてて紹介するほど面白くないものばかりだが、一つ挙げるとすれば、みな定員割れによって席を与えられた、入試紙面において紛れもない不合格の者原である。されば膂力りよくといえ、この科には部活というものがなく、どの肌も白い。それら十二名と、教室割りをも変わらず中学一年生から付き合わされてきたあーちんをして、学園への怨恨と同窓生への侮蔑が日毎に根深くなつていくのはどうしようもなかった。

「神谷よ、」

と、この烏合の同窓生の間にある暗黙のヒエラルヒーで、あーちんとともに首領格にある岩本遼が膝を寄せてきた。

「昨日理事長や校長らが、みどりの親数十を召集し説明会を催した話、知つとるか」

みどりとは、あーちんらの所属する蒼穹科そうきゅうをさす隠語である。

「経営難で、もうこの科が潰つぶえるらしいがな。その説明会がどうしたや」

と、わざととぼけてみせた。

(この泥舟の結末など、入学当時から知つとつたわ)

あーちゃんは、いまさら憤慨する遼に閉口した。

「そう、今後は普通科すくとの同化政策が増えて俺らの優越権ブライントは軽量化されてくわけだ。言つてしまえば、それを求めて中学受験してきた俺らは、学校に事実上欺かれたことになる」

頑な正義感を蔵す遼は、自らの愚痴で血が煮えたぎり、ついには言葉遣いさえ下品になった。

「わが親いわく、理事長以下経営陣は、辞を低くして謝罪すらせんどころか、途中、説得にこんが萎えて帰りやがったと」

「俺もかくのごとく聞く」

「……腐つとる」

「ああ、腐つとる。　だが、」

と言葉をつなげ、

「俺は、入学した当初から今のお前の憤慨をひきずってきたぞ」

左頬を歪ませ、「あれらを見てみよ」と顎をしゃくった。

「阿呆が十一名おる。あの内で、胸中におんしと同様の憤りを持つ野郎があるかや。ぬシア、みどりを愛しとるんだらうが、俺はみどりがために思春期を逼塞せしめられてきた」

「愚なことを……」

「幸い、俺には東國軸という名の扱るべき本丸が見つかった。早う、お前も扱れ所つちゆうもんを見付けろや」

「二日酔いで酒臭い野郎が誇る居場所など」

と遼は言おうとしたが、咽喉に留め、教室移動を理由に去った。

(世間知らずの用無しどもめ)

と百三十に満たぬ全蒼穹生に腹が立つてきた。

あーちゃんには、年齢不相応に社会の酸い甘いを見知っているという自負がある。祭という小天地は血縁関係の錯綜地帯で、ことに東町は江戸時代からの町組織を重んじ、およそ現代社会から孤立した封建的組織を貫いている。その二つが内向的文化を促し、拳母の地域史さえ知らぬ不明の頭目を戴き、かつは血筋一つで差別も生み、町内の確執が伝統にさえなった。それらは本番の華で濁して美談にし、不問に付してしまふ。

(それが上町衆の性根だ)

とあーちゃんは信じ、またそれが世の常であるとさえ思っていた。

去年、齢十五にして酌の作法を仕込まれて以来、わが思春期を四百年の歴史がこねまわした混沌たる社会で徒手空拳を舞って投資してきた。

それを思えば、

(わが自尊心を満たす東町へ血誠をもって奉公するのみぞ)

耄碌した学園がどうなるうと知ったことではなかった。

一時限目は「生物」である。

理不尽にも、この合同授業のとき、あーちんらは他校同然の普通科棟へ足を運び、机を置いて受講するよう強いられている。

(クズとの同化政策か)

左頬をゆがめられずにはいられない。

(クズとは誰のことだ。まさか、普通科がクズとはほざくまい)

遼のいいたいことは分かっている。この教室の半ば以上をいながれる三カ年科を示す縹色はなたの上着を羽織った特進科生は、自分の姓名をようやく漢字で書ける白痴の普通科に毛の生えたような者原であることには間違いない。ただし、運動能力が桁違いに優れている。特進の意味すべきところは学力ではなく膂力であり、ありようはスポーツ推薦による大学進学率をいうのだろう。

それに較べて、なんと狭小な餓鬼どもよ。

学力の高低で人物の才器を計るみどりを呪った。全国的水準の偉丈夫を、全国的水準に達せぬ鶏口牛後のわが学力をもってクズとほざく涼しげな面つきが面白くない。

「あの前、」

ひそめた声を、斜後から耳に拾った。

「豚鼻の緑、臭くないか」

「あいつかい。どおりで脇が黄色いわけだ。緑はみんなそうだ。卓上から離れれば、無能な雑魚ばかり」

(言つな！)

苦痛のあまりに豚鼻を恨んだ。

五年間、それら穢けがらわしい阿呆らと同視を注がれ続けてきたことが苦痛で、三カ年科への転入を担任へ直訴したことさえあった。

それほど、わが制服を呪っている。

「あその普通科くす、今何か言つとつただらア」

加納博嗣くわなひろつぐという、熊か何かがたまたま人間の形をして生まれついたような男が、声をひそやかにしてたずねた。

「顔は悪いのに耳はさといな」

仲間の加藤郁男が狐のような目を細めて揶揄した。「みどりはキモいんだとさ」

あーちゃんは乾いた語調で博嗣に教えた。

「はあっ？何をほざくや」

博嗣は嚇として、前歯で弄んでいた飴を噛み砕いた。郁男は、博嗣の様子にたじろいだ。気の小さな男である。

(妥当だろ)

肚で嗤ったのはあーちんである。教養なき三カ年科も心身軟弱なみどりも、所詮自分には及ばないと思っっている。

腕を組み、そこへ頭を据えて伏せたとき、鳥肌がざわめいた。啞内に、酒の味を覚えたからだった。

鐘が鳴った。

野球部の坊主頭が陽に焼けた額を相寄せて、むくりと起きて教室を辞するあーちんの背を瞥見、

「蒼穹は気が楽でいいな」

と、嘯いたのが聞こえた。

(さもあるつよ)

どんな話題からその台詞が出てきたかは知らないが、公立中学校を経てきた者から見れば、なるほど、蒼穹生など温室野菜であろう。

「繁毅よ」

廊下を共に渡る同朋に声をかけた。

「あん？」

「血がわくわい」

「たこができるわ」

「なにが」

「この間から、そればかりをこの耳は聞かされとる」

杉山繁毅は、猿のようにしわばんだ顔をことさら崩して苦笑した。

「あっははは」

「朝から元気だな」

繁毅はほくほくと相好を崩しながら、この蒼穹一の無頼漢を好も

しく思っている。

階段を降りていると、

「おや、光源氏やん」

すれ違い様、普通科の小男が数人の友とたわむれ去りながら、仲間内で作ったのだらう渾名あだなをもってあーちんをからかい半分に呼んだ。

「もう、ケツタ（自転車）を盗難はくっちゃだめだぞ」

「うるせエよ、ガキが」

外の渡廊下は、西すれば駐輪場が広がっている。そこへ何がともなく眼だけをやりながら、

「いやさ繁毅よ」

楽しげに語りだした。

「喇叭らっばをふくんだ、今年の祭でこの俺が」

「喇叭？」

「本来は軍隊で進退指揮などに使うものよ」

「それをなぜ祭で使うや？」

「景気づけだら？俺もその経緯は知らん。静岡の浜松祭でも使うものだから祭具としての由緒は、どうなんだろう」

「紙吹雪を撒き散らす祭だからな、なんでもありか」

階段を昇りおえたところで、繁毅は揚々と声を弾ませて言った。

「繁毅よ、冗談は顔だけにしときな」

二限目は「体育」である。

繁毅の陽気のゆえはそれだろう。

（子供め）

鼻先で憫笑びんしょうし、教室の席の脇に引っかけてある鞆から、つややかな鍍金塗りのそれを掴みあげた。

ピストンはない。管は三周し、内側を向いた輪に朱の紐ひもを通して朱房を二つ垂らし、ことのほか胴の金色に映える。

あーちん、歌口に唇にあて、刹那、吹き上げた。

十二名は霹靂へきれきにうたれたように驚き、体操着に着替える手をとめ

て振り返った。たわけが何を、とは誰もささやかない。それにも増して、

（不思議なやつだ）

と、小首をひねっていよいよこの人物を奇妙に思うのであった。

あーちゃんという人物には、生活を五年も共にしてきた同窓十二名でさえ解らぬところが多かった。

トウゴクジク

という組織で熊の肝いをなめてからというもの、この男の人物の根本が覆った、という感は十二名ひとに均しく印象している。

これが基に、

（傲岸ごうがんになった）

という不満が濃くなった。以来、まるで高座から嘲を含んで見下しているかのような冷たさをあーちゃんの言葉のはしばしから感じている。

（部活紛いの組織にのぼせおって）

汗か酒か解らぬ飛沫を散らかして喧騒けんそうする祭という過疎文化に何を見たというのだ、という程度で思慮が届かない。とはいえ、半面では好意も持っている。

「文化祭は映画にしよう」

と、この男が提案したのは、この年の晩春の頃であった。

「……………」

みな牛でも話したかのような驚き様で、この男に振り返った。

「それは一興」

と、ただ一人、掌たなを打って面白がったのは担任であった。かつて、この蒼穹そうきゆうをして試みのなかったことであるらしい。

「何の映画よ」

一人が声をあげた。

「格闘」

あーちゃんは一言で答えた。

「役者は誰よ」

「俺らだよ」

粹なことを言ったものである。みなは素直にその言葉に感興をもよおした。消えゆくこの科に、寸尺すんせきでも足跡を残したいという願望はみな同じであったのだろうか。

「やってみようか」

みな、膝を打って面白がった、ということがあった。

（さらにさかのぼれば。）

と、繁毅は一年生の冬を回想した。

七限目の選択講義を抜け出して帰宅する方法すべについて、繁毅のほかに加納博嗣、あーちゃんと膝を寄せて花を咲かせていた。

「非常階段から」

「便所に隠れて時宜を見て」

「いやいや渡り廊下から駐輪場へ抜けて」

と、ことが座興だけに三人の空想は現実感から諧謔味おかしみをかきたたせ、その時の心臓の脈拍、友の怯えた顔のしわ一つまで手にとるようにして想像ができた。ふと、

「抜けない？」

あーちゃんが声をひそめて提案した。

「やるか」

二人は息をつめ、顔を引き締めた。想像が膨脹するうち、三人は分別を失った。

「やめとけよ、って俺は言ったからな」

小心の加藤郁男は、後に共謀の疑惑をかけられまいと小細工を打った。これが郁男の思いつく弥縫策ひほうさくの限界だろう。

「臆病め」

六限目が終わるとすぐに学活があり、その後一旦、担任教師は職員室に戻る。その隙をついた。

「用意！」

という一ツ目の号令で、さつと鞆を脇に挟んだ。

「上履！」

二ツ目の号令で履物を脱ぎ、そろり教室を抜けた。残された十名は、応援を眼差しから送った。

三人は廊下を駆け、階段を転がるように下り、あしおと蹬音を殺して駆けに駆けた。渡り廊下を抜けると正面に下りの階段が見えてくる。

ここがあたが安宅ノ関である。

左に職員室へ通じる廊下がのびているため、しよつかい哨戒に出くわせばこの座輿の帰趨はしれている。が、駆けた。

「正面突破か」

加納博嗣は一瞬たじろいだ。その一瞬分、足が遅くなった。

下り階段まであと一足だった。そこへ担任と遇会、鉢合わせの格好となった。

「加納！」

振り向くと、担任がもかく博嗣の巨体を支えて四つになって組み合っていた。あーちんと繁毅が担任の眼前を駆け抜けたときは、担任にとってあまりにも不意の出現であり、見過ごされたのだろう。

二人が鼻先を階下に向けたのは、ほぼ同時であった。

「加納、御免！」

博嗣を捨て殺して駆けた。南門を脱した二人は今来た道を顧みて、腹の筋をよって転げた。

「加納、ざまアねえや」

「面白い面白い」

繁毅も、この背徳感と達成感に膝を打って狂喜した。

「神谷！」

時をまたず、担任が色をなして追ってきた。

「逃げる！」

二人は学校の周りにそうせい蔭生する胸ほどの丈の草叢に潜り込み、追手から逃れた。

（いやいや、会長立候補から就任の折もなかなか面白かったわ）

繁毅は、再び着替える手を動かし、思った。

「これも半年ほど前、

「誰か、会長の推薦はないか」

担任が、教室の一同にむかって声を張る光景は見飽きていた。

(面倒くさいのオ)

あまねく、胸裡でつぶやいていた。

「他学年の候補者は？」

と、あーちゃんは興もなげに質問をした。曰く、藍染有紀菜という

先輩が立候補したという。

「あの醜女がや？」

眦まなじりが裂けるほど眼をまるくして驚嘆した。担任は「こらっ」と一喝、あーちゃんの失言を窘たしなめたが、それは耳まで届かない。

俺がその向こう脛すねを尻ないでやろう。

「自分が立候補します」

と名乗りを上げた。

「つきましては、書記に柴田、副会長に繁毅を推薦したい」

「はあっ？」

柴田隼人と杉山繁毅は動揺した。

「考えてみ」

あーちゃんは、寛闊な微笑で二人を制した。

「蒼穹の生徒会選挙など、なるほど昼行灯よ。だが、その昼行灯で形骸けいがいか化した儀式に、暇潰し程度に参加して当選すりゃア、内申がにぎわい推薦枠をもらえるンのやぞ」

「落選に転べば？」

「脚光を集めて名が騰あがるわ」

要するに、あーちゃんは目立ちたいのである。そうとは知りながら、二人はあーちゃんの理に首を縦にふった。むろん、使命感より甘利を目論んでのことだが。

結局、三人は無事に当選したが、あーちゃんはその任期中に自転車盗によって謹慎処分となる。

(当選するのみでは脚光が足りなんだや。神谷らしいぜ)

繁毅は、教室から廊下へ出た。

「おい、杉山」

すれ違ったとき、声をかけられた。青坊主の教師であった。

「あ、指導部の」

「神谷はおるか」

「ご自分で」

確認せよ、と嗤った。マナビヤ、センセイ、コウソクが何者ぞ。

ある蒼穹科指導部など、わが担当学級に在籍する某生徒からすでに許していたはずの某大学の一般推薦枠を取り上げ、よりにもよって、同学級にあつて六年間も某生徒へのイジメを主導してきた女子生徒へ与えた、という耳を疑う話を某生徒本人からきいたことがある。

その推薦枠は限定一人とされていたとか。聞けば、その枠を横奪したイジメ主導者の女子生徒というのは、蒼穹科が^{ひこ}覇^きする中学受験指導塾の娘であるというではないか。

キョウウシなどという下衆人間が、われら生徒への面を下げて「指導」をしようというのであろう。

あーちゃんが歌口から唇を離したとき、

「神谷、ちよつと来い」

と、廊下から青坊主が手招きしていることに気がついた。

「体育を休む理由が見つかってよかったわ」

左頬をゆがめ、左右に言い残して廊下へ出ていった。身体の疲労は、思慮の見落としにつながる^とて自己療養をしている。体育などで体を動かして祭の奉公のときに動けなくなつては、何のための日常か分からない。

屋上。

仰向けに寝転んだとき、眼をつむった。陽がまぶしい。それがえもいわれぬ心地よさで皮膚をあぶる。風はない。穹^{そら}には一^{いち}朶^だの白雲

があるのみで、あとはどこまでも蒼がつづいている。野は碧く渺茫として、所々に鬼百合が咲いている。校舎は、そこからいきなり突兀とそびえている。

校舎、築十二年。

その役目としての時間は残りいくばくもない。

(母校がなくなる)

だが、この建物のみが壊されずに残るといふ。

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

真宗知識の恩徳も

骨を砕きても謝すべし

宗歌を口ずさみ、ふわつと一つ大欠伸をかいて四半刻ほどまどろんだ。

(潰れるなら校舎もろとも芥となれ)

鐘が鳴り、二時限目が終了した。

あーちゃんはしょぼつく眼をこすり、再び大欠伸をかき、屋上から蒼穹科講堂へむかった。

その途上で同窓生の群と合し、講堂の床に列をつくって座った。やがて全蒼穹生が揃うと、三カ年科校長と蒼穹科校長が舞台にあがった。

(……………)

生徒、みな前を向かずに隣同士で私語し、ときどき殺気だった眸子をもって舞台上の二つの影をこもこも睥睨している。

「みなさん、こんにちは」

三カ年科校長はマイクロフォンを手にとり、最初に放った言葉はひどく不快げな語調の挨拶であった。

「……………」

一片の返事すら返らない。生徒の精一杯の意思表示である。二学

期の始業式から、数名の蒼穹科専属教員がいなくなった理由を知っている。

（そして、その先生達が蒼穹科の存続を訴える旗頭であったことも）
「挨拶をしなさい！」

校長は一喝し、強引に生徒の咽喉から声を搾り出させた。

「ご存知のとおり、蒼穹科の今後につきましては、」
（言い訳を始めるのか）

今すぐ土下座しろ、とあーちゃんは一喝したかった。普段、生徒の不正に対して問答無用に取り締まり、先日もあの口がおのれに謹慎処分を言い渡したかと思えば、なにやら諧謔味がこみあげてくる。

校長の表情には、隈くまがない。

（悪びれとらん）

校長、時折笑みを交えてわが生い立ちを朗々と語っている。

「私は、貧困から学業をまっとうすることができずにつらい思いをしました」

それに較べて君達は恵まれている、と言外で語る。

無念ではないか。蒼穹という看板を慕って入学したあーちゃんには、わが境涯があまりにもやる瀬なかった。

そう思つほど、口蓋垂の一寸手前まで、

「なぜ、ゴメンナサイが言えぬ」

という怒号が熬々（ごうごう）とせきあげ、まさに床に拳を突いて立ち上がるうとした。

果たして、俺は起てるか。

と自問した。しかし、左右を見、蒼穹科専属教師らを見、果たして起つことはできなかった。再び校長を見たとき、にわかに拳から力が失せていった。

（一介の生徒風情がわめき立てたところで何が変わるう。生徒など、結局は教師が教鞭でさす黒板の不条理を飲み下し続けるほかないのだらう）

と、見上げた天井の水銀灯のまぶしさが網膜に焼きつくよりも強

く、深く常識に刻んだ。生来、人よりも苛烈な正義感の窒息は、祭という封建的な天地で鍛えられている。とはいえ、思春期の精神状態は上から押して下へ抜けるような単純構造ではない。

（そもそも校長ではなく、経営元の学園長小串みずから壇上で額をこすりつけるべきではないのか。世というものは、こういうものなのか）

解せぬ。

学園長小串は同日、学内駐車場で高級車にゴルフ鞆をつめているところを目撃したとも、どこかの講堂で学校教育のあり方を講演していたとも後日聞く。

神無月十六日土曜日、亥ノ刻を少し過ぎていた。

「解散！」

白くもった息の中から、若衆年行司の下知が大音声で下った。

「明日はシンガクだ」

とはしゃぐ先輩を尻目に五、六の影が会所の玄関へ吸い込まれていった。

「神谷さん、灰皿以上です」

新参永井がせわしく報告した。

「応」

あーちゃんは手桶の中へ、十数枚の灰皿の中身を捨てた。手桶の中はヤニで黄土色になった水が半ばまで満ち、水面は溺死体のような吸い殻で埋まった。

水周りでひしめく三、四の背を尻目に転がるように外へ出たとき、振り返った空に息を詰めた。

見事な。

満天の星座を背に構えた山車蔵は観音開きに扉を開けはなち、その中で荘蔵と聳える山車の雅やかさはどうだろう。紫檀の高欄、

鏡板、九本柱、豊かな黒漆に塗り込められた唐破風屋根、上山下山

の欄間々々でうねる金漆の竜、獅子、象、波浪の彫刻、満身に施された黄金の金細工。

これらが、樋とに固定した篝火かがりびのようにまぶしい電光に乱反射し、燦然さんぜんと暈光を放っているのである。

表の中ノ町通の宵闇に向かつて傘を葺ふいた提灯二基は、蛇腹の表皮に、「会所」と大書され、燭しよくをゆらゆらと燃やし妖艶めいている。あーちゃんは手桶を抱えたまま玄関前できびすを返すと、内一基の作る一幅いっぶくの灯影に小腰をかがめて手桶をおろした。そのとき、

「お前は何をチンタラしとるだ。下の失敗は、上の責任になるんやぞ」

という怒声が玄関あたりから降ってきたため、

すわこそ、

と縮み込んだが、どうやらあーちゃんのことではないらしい。

「失礼しました」

(ハキとしたところ、新参永井だろう)

かがめた猫背でなりゆきをうかがった。

「俺はええ、年行司には迷惑かけんなや。前日やぞ、お前もつまらんことで殴られとうなかるう」

怒号は鳴り止んだ。

(しかし、ここから陰湿なんだ)

と想像しながら、煙草のヤニで黄ばんだ汚水を側溝にチンタラと流している。

(一人の先輩を怒らせると、世話役一同からぐちぐちと厭味を言われるんだ)

今頃、その最中か。

最後の一滴が側溝の闇へ消えたとき、癖で手のおいを嗅いだ。

「臭ついなア」

吸い殻がこぼれぬよう、手で水を受けていたためだ。

息が白い。ぶるつと身震いをした。

(集合時間である曉闇には、さらに冷え込むことだろう)

懐から先輩からもらった一合瓶の清酒を取り出し、一気に飲み干した。

「寒けりゃ温めるまでよ」

夜明けまで、あと二刻と半。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6032k/>

痴話と余談の事作

2010年10月9日22時08分発行